

研究報告：秋田大学医学部保健学科紀要17(1)：41 - 47, 2009

車椅子疑似体験学習における障害のある方の参加の意義

金城 正 治

要 旨

当大学作業療法学専攻では、2年次と3年次の車椅子疑似体験学習において、平成17年度より脊髄損傷の方が参加して実施している。そこで、今回の研究では、車椅子疑似体験終了後に学生と参加した脊髄損傷のある方に実習の意義、内容についてアンケート調査と面接を実施し、分析した。

その結果、学生は障害のある方の参加に対して、90%程度が良かったと回答していた。自由記述でも行動や話すことにより理解や気づきが深まっていた。脊髄損傷のある方は実習内容に肯定的であった。自由記述でも車椅子疑似体験の意義を認め、継続の必要性を指摘していた。また、脊髄損傷のある方自身もバリアへの気づきが見られた。

よって、車椅子疑似体験で障害のある方の参加は、学生や障害のある方にも有効であることが示唆された。

はじめに

我々はバリアフリーを理解する上で、障害疑似体験を導入する事も多い。中野¹⁾は疑似体験セミナーでこれらの意義と限界を説明し、道具や手法を紹介している。しかし、久野²⁾はこれらの疑似体験は、「できない・困難」という負の面ばかりが強調され、障害者に対して負の価値づけがなされることになると述べ、実は適切ではないとしている。徳田³⁾らも障害理解教育の重要性をのべ、学校教育での疑似体験の有効性と間違った障害理解を指摘している。

これらを改善するために、福島⁴⁾らや中野⁵⁾らは障害のある方が参加しての疑似体験のワークショップを開催し、体験的・共感的にバリアの存在や適切な配慮について「気づき」を共有でき、有効だと報告している。

本大学作業療法学専攻でも障害疑似体験を講義実習で取り入れていたが、平成17年度より車椅子疑似体験学習で脊髄損傷の方が参加して実施し、その内容の一部について金城⁶⁾が報告した。大学教育では小川⁷⁾らも疑似体験と障害者の語りを併用して一年次の教育で取り入れ、学生自身の振り返り、障害者自身から提供さ

れる経験を理解することになったと報告している。よって、障害疑似体験に参加している障害のある方の意見や、学生が障害のある方と一緒に行動することの効果や、学生が障害のある方と一緒に行動することにより、障害疑似体験の内容の妥当性や質の向上につなげることができる。

そこで、本研究では、車椅子疑似体験に参加した脊髄損傷の方と学生を対象に、体験実習終了後にアンケート調査と、一部の方には面接調査も実施したので報告する。

方 法

1. 車椅子疑似体験学習の含まれる講義・実習について

車椅子疑似体験学習を行う科目は、2年前期の「障害者生活技術論」、3年前期「運動・神経障害者生活技術・環境論」、後期の「運動・神経障害者生活技術・環境論実習」の中で実施した。

これらの科目の共通の目的は、「リハビリテーションに従事する者として、障害のある人の生活技術や環境を学習する上で、ノーマライゼーションや障害理解

は重要な価値概念である。この科目では、これらを理解するために障害理解の方法、バリアフリー、ユニバーサルデザインを学習し、障害疑似体験・発表討論会を通して知識や捉え方を獲得する。これにより、障害理解、生活や環境の障害を深め、職業人としての態度を養うことができる。また、文献調査・体験・討論により多様な価値観が身につく」とした。

到達目標として、車椅子疑似体験に関係する項目は、「ノーマライゼーションを説明できる、バリアフリーについて説明できる、障害疑似体験の企画、実施、調査、報告ができる、障害のある方の環境に関心がもてる」とした。

そして、車椅子疑似体験では、「仮の体験ではあるが理解を深めるには有効な手段である。しかし、障害には多様性があるので、この体験だけで障害の理解を過信しないように注意する」と補足説明した。

2. 車椅子疑似体験学習の方法

車椅子疑似体験学習は、当専攻の2年生と3年生の各学年2～3名、全国脊髄損傷者連合会秋田支部会員の車椅子利用者1名の合計5～6名でグループをつくり、実施した。平成18年度と19年度ともにグループ数は9グループであった。

本学では障害疑似体験を2年生と3年生に導入し、2年生は専門的知識が十分でなく、3年生は専門的知識を学習獲得している前提で実施した。この異学年での取り組み内容については金城⁹⁾が報告した。

車椅子疑似体験学習の日程は、4月～5月までに各グループで企画し、6月に車椅子利用者と打ち合わせを行い、7月～8月までの1日を利用して疑似体験を実施した。企画案は「運動・神経障害者生活技術・環境論」の1コマを利用して行った。3年生が中心になって企画し、脊髄損傷の方への連絡と打ち合わせを行い、最終的に教員もチェックして決定した。実際の車椅子疑似体験は、平日の講義実習予定日の1回(2コマ)を休日に日程変更して実施した。

車椅子疑似体験学習の実施する課題は以下の内容とした。「時間が約6時間以上、体験場所などは施設が2箇所、食事をする店や喫茶店が1箇所、公共交通機関の利用(バス、タクシー、電車など)、障害者用トイレの利用、車椅子駆動や介助操作は各学生交代しながら実施する、実習の最後に約1時間程度脊髄損傷の方と意見交換する」とした。安全、介助や調査を確保するため学生1名はフリーな状態で実施した。教員は、参加学生数が少ないグループには直接参加し、その他のグループでは大学で待機していた。

実施日には、学生は角度計、メジャー、デジタルカ

メラを持参し、調査シートを参考にしながら、まわりの環境を観察し記録した。適宜必要な箇所は写真にとった。

学生は実習終了後に、内容や感想をまとめ、ポスター発表形態にして学内廊下に掲示した。そして、10月に発表会を実施し、内容の検討や共有を行なった。その後、レポートのコピーを全国脊髄損傷者連合会秋田支部に送付した。

3. 研究方法

車椅子疑似体験学習終了後に、実習の内容や意見などを知るために、学生と参加した脊髄損傷の方にアンケートと面接を行った。アンケートは平成18年度と19年度に実施した。対象は参加した2年生が54名で42名(回答率78%)が回答、3年生が37名で30名(回答率81%)から回答が得られた。

学生のアンケートの内容は、バリアフリー体験はあなたのためになりましたか。講義でこのような体験があったほうが良いと思いますか。バリアフリー体験(計画から実行、レポートをまとめるまで)の進め方はどうでしたか。違う学年と一緒にやったのはいかがでしたか。障害のある方とやったのはどうでしたか。2年生の時の実習と比べていかがでしたかの項目を設け、5段階で回答できる評定尺度と自由記述を組み合わせて実施した。そして、アンケート調査用紙の最後に、この学習で分かった事実や感想も記述できるようにした。自由記述、わかった事や感想は、記述された文章をキーワードにまとめて集約化して分析した。特に今回の研究では を中心に検討した。

脊髄損傷の方は、平成18年度と19年度に重複もあるが7名が参加した。アンケートは6名の方から回答が得られた。更に了解の得られた3名に対して面接調査も実施した。

脊髄損傷の方へのアンケートは、バリアフリー体験指導はいかがでしたか。体験の内容はいかがでしたかの項目を設け、評定尺度による選択と自由記述を組み合わせて実施した。最後に意見や感想の自由記述欄を設けた。面接はアンケートの内容を基礎資料として。更に意見や感想などを尋ねた。アンケートの自由記述と面接の内容はキーワードにして集約化してまとめた。

なお、アンケートについて、学生と脊髄損傷の方には、アンケート用紙を配布する前に口頭で説明し、同意を得て実施した。面接についても同意を得た。

結果

実際の車椅子疑似体験の実施場面の写真を図1～図3に示した。図1がバス乗車場面、図2がエスカレータで上っている場面、図3がオートスロープ（動く歩道）での移動場面であった。

次に学生へのアンケート結果をみると、「障害のある方と一緒にやったのはいかがでしたか」への回答を図4に示した。3年生では、非常に良かったが90%（27名）、少し良かったが7%（2名）、普通が3%（1名）であった。自由記述では、「講師の方に質問できて良かった」、「得るものが大きかった」、「交流が深められた」、「障害のある方から実際的なことが聞けて良かった」、「意見交換は重要」などの記述があった。

2年生の回答は図5に示した。非常に良かったが84%（31名）、少し良かったが8%（3名）、普通が8%（3名）であった。自由記述では、「当事者から教えてもらいよかった」、「車椅子の人から話を聞けるのでよかった」、「経験が聞けて良かった」などの記述があった。



図3 オートスロープでの移動場面



図1 バスへの乗車場面

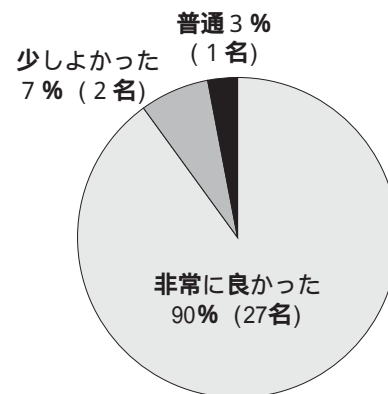


図4 3年生の「障害のある方と一緒にやっていかがでしたか」の回答



図2 エスカレータでの移動場面

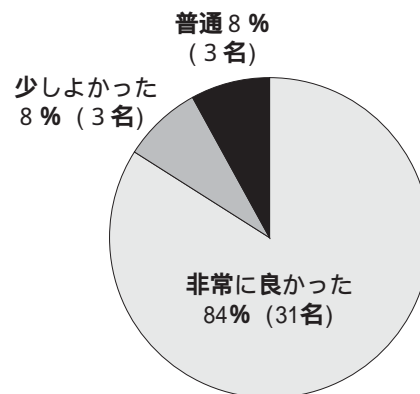


図5 2年生の「障害のある方と一緒にやっていかがでしたか」の回答

脊髄損傷者の方へのアンケートで、「体験実習に参加されていたかがでしたか」への回答は表1に示した。非常によかったが1名、まあまあ良かったが5名であった。自由記述は「疑似体験実習の意義」、「学生の実習姿勢」、「指導内容のレベル」、「脊髄損傷の方の自らの気づき」に集約できた。「疑似体験実習の意義」では、車椅子に乗ってみなければ気付かない点に気づいたなどがあった。「指導内容のレベル」では、どの程度教えればよいかなどがあった。「脊髄損傷の方の自らの気づき」では、路線バスは使いづらさを感じるなどがあった。

「疑似体験の内容はいかがでしたか」への回答は表2に示した。非常に高いが1名、まあまあ妥当であるが5名であった。コメントでは、「実習内容の肯定的評価」、「実習内容の提案」、「学生の知識レベル」、「自らの気づきや活動の展開」に集約化できた。「実習内容の肯定的評価」では、車いすに乗ることで気づいてもらったなどがあった。「実習内容の提案」では実施する施設の提案などがあった。「学生の知識レベル」では、学生はどの程度知識を習得しているかなどがあった。「自らの気づきや活動の展開」では、災害時の避難場所はここにあるが、災害時の障害者はどうすればよいか。また、バス乗車の体験について現状をバス会社に共同で報告してみてもどうかなどがあった。

面接内容は表3に示した。内容は「教育の必要性と継続性」、「綿密な実習の打ち合わせ」、「新たな役割の獲得」、「自らの気づき」の4つに集約できた。「教育の

表1 「疑似体験に参加されていたかがでしたか」の回答

<結果> 5 非常に良かった : 1名
4 まあまあ良かった : 5名

<自由記述内容>

- ・疑似体験実習の意義
 - ハード面だけでなくソフト（人的）も体験できた
 - 車いすに乗ってみなければ気付かない点も気付いていた（2）
 - 有意義な1日であった
 - 良かった
- ・学生の実習姿勢
 - 学生の真面目な姿勢
 - 学生の姿勢に喜びを感じた
- ・指導内容のレベル
 - どの程度教えればよいか
 - どの程度知りたいのか
 - 学生はどのように感じたか
- ・自らの気づき
 - 路線バスは使いづらさを感じる
 - 地方へいくと列車、バスが使いにくい
 - まわりをみてないと気付かない

必要性と継続性」では障害のことを知ってほしい、教育を続けてほしいなどがあった。「綿密な実習の打ち合わせ」で、脊髄損傷者の方と実習の打ち合わせで不十分な点は、集合場所や時間のあいまいさ、何を学びたいのか、学生への連絡先、もっと早めの連絡などがあった。これらに関して、学生への実習終了後の聞き取りや発表会、レポートからみると、学生は打ち合わせが十分でないことをあまり認識していなかった。「新たな役割の獲得」では、自分の体験やバリアフリーの考え方が話せる、訪問先で逆に質問されるなどがあった。「自らの気づき」ではバスに乗ることがないので実感できたことや、バス運転手の対応も回を重ねるご

表2 「疑似体験の内容はいかがでしたか」の回答

<結果> 5 非常に高い : 1名
4 まあまあ妥当である : 5名

<自由記述内容>

- ・実習内容の肯定的評価
 - 学生も車いすに乗ることで気づいてもらった
 - 私たちのことを少しでも理解してくれてありがたい
- ・実習内容の提案
 - 公共施設のチェック
 - 県庁、市町村公民館、学校なども体験実習場所に入れてみては
 - ユニバーサルデザインに変更
- ・学生の知識レベル
 - 実習前の学生の知識範囲
 - 調査範囲はどのように決めているのか
- ・自らの気づきや活動の展開
 - 災害時の避難場所、障害者はどう避難するのか？
 - バス乗車の体験について現状をバス会社に共同で報告してみてもどうか

表3 面接で得られた内容

- ・教育の必要性・継続性
 - 若い人にも色々な障害のことを知ってほしい
 - この教育を続けてほしい
 - 困っている人がいることへの理解
- ・疑似体験の綿密な打ち合わせ
 - 事前の打ち合わせをもう少し詳しく
 - (集合場所、もっと早めの連絡、学生連絡先)
- ・新たな役割の獲得
 - 学生に自分の体験を話せる。
 - バリアフリーの考え方。訪問先から質問されて答えた
 - 私たち自身はバリアフリー対策をどうみているか
- ・自らバリアの気づき
 - 普段はバスに乗ることがないので実感できた
 - バス運転手の対応も回を重ねるごとに良くなってきている
 - バリアフリーへの対応は、自分もまわりを見てないと気づかない点が多い

とに良くなってきている。バリアは自分もまわりを意識してみないと気づかないことが多いなどがあった。

考 察

リハビリテーション医療に関わる大学生の教育で、障害疑似体験はよく利用されている。栗原⁸⁾らは車椅子体験学習のため学内や学外にコースを設定して、実施し、学生の反応を報告している。その中で坂道、傾斜路、信号の横断で介助を受けた場合に恐怖心があったとしている。そして、このような体験の積み重ねが重要であると述べている。小林⁹⁾はリハビリテーション学院の1年次に障害体験を導入し、物理的なバリアの認識とともに心理的なバリアが学生に強く影響したと述べ、障害者の立場から考える機会になり、専門教育への導入として意義があるとしている。当大学作業療法学専攻の障害疑似体験の実施については、金城⁶⁾が、障害のある方を取り巻く環境を理解できたことを報告している。このように医療や福祉系の高等教育機関でのバリアフリーや障害を理解する教育としては有用な手段となっている。

しかし、この障害疑似体験は久野²⁾らや徳田³⁾らの指摘のように負の強調だけにならぬように、実施していくことも必要であるとしている。その一つの方法として障害のある当事者の参加が重要となってくる。それによって、学生と当事者の気づきによる障害理解が学習されるとしている。今回の実習で、学生はバリアの気づきとともに、図2や図3のエスカレータでの移動技術、キャスター上げ、段差やでこぼこのない道路を選択して快適に移動する技術など、脊髄損傷のある方の車椅子の操作の能力の高さを理解できていた。逆に図1のバス乗車時のスロープでは、駆動能力が高くても自力では困難であることが、スロープの勾配など数字的に学習していたものが実際に理解できた。

また、図4、図5から障害のある方と一緒にやるのは、2・3年生とも約90%が良かったと回答し、当事者と一緒に行動し話すことによる理解が深まっていることが自由記述から分かった。特に疑似体験実習の最後の1時間の意見交換は、実習の内容の振り返りとともに、脊髄損傷の方の意見や経験を聞くことができより効果的だと思われた。この疑似体験学習では単にバリアだけの理解でなく、脊髄損傷のある方の能力や意見、学習したことを実際の場で確認することができていた。

3年生は、この疑似体験を2年生でも一度体験しており、また、グループで主体的に企画し、バリアフリーなどの知識の学習を終えているので関心が高いことも

うかがえた。しかし、表3に示すように打ち合わせや連絡では不十分なところもあり、相手がある課題の取り組みでは少し不十分であることが分かった。連携型学習は、連携する相手との連絡調整、行動する能力も身につけて体験、学習していくことも重要な要素なので、これらを学生へフィードバックすることにより理解が深まり、連携する時の学習となると思われる。

脊髄損傷のある方の場合の実習への参加は肯定的であったが、自らの体験や考えを実習の内容でどの程度を指導すればよいか悩んでいるのもあった。実習要綱については代表者に口頭で説明し、また、参加者個人には郵送したが、実習についてもう少し詳しい打ち合わせが必要だと思われた。また、学生が実習で学習した内容をまとめたレポートを代表者に報告していたが、参加者個人レベルへの情報提供も必要であると思われた。

実習に参加したことにより、脊髄損傷のある方自身にも気づきがあった。今回参加した方は改造自動車を所有しており、バスや電車は利用することがほとんどなく、バス利用の不便などを具体的に分かったようである。また、施設や建築物のバリアフリーの設備でも知らなかった面もあり、逆に分かったこともあった。

実習内容についても妥当であると評価しており、学生がこれらについて勉強することも大切であるとしていた。そして、実習での体験場所の提案、学生の知識や調査内容に関心も示していた。また、体験場所や施設では、逆に施設職員や従業員からバリアフリー対策についてたずねられることもあった。バスへの乗車体験は、後日学生の報告をもとに共同で報告した。この車椅子疑似体験が当事者である脊髄損傷の方にも行動展開のきっかけになったことがわかる。

小坂橋¹⁰⁾らは、障害疑似体験に参加した肢体障害のある方が不便については分かったつもりであったが、再確認できたことが述べている。このように障害疑似体験に障害のある方の参加の意義として、一方的に学び指導する体験学習ではなく、学生、障害者、地域が互いに学びあうことができることが示唆された。

しかし、近年、障害のある方が参加・指導した障害理解教育や障害平等研修が実施され、障害者が主体になって行うことの重要性も報告されている。Kath Gillespie¹¹⁾らは英国や北欧では障害啓発活動という中で、障害のある方が指導し、疑似体験ではなく、障害の社会モデルを基本概念におき、事例やワークショップの形式で、差別や不平などを認識し、行動計画を立てる参加、指導の重要性を指摘している。岩田¹²⁾も英国の疑似体験を報告し、障害理解のプログラムの課題を提示している。よって、障害理解では、障害疑似体

験の意義や障害平等研修もふまえて、これらの教育プログラムを障害のある方と共に開発していく必要がある。

結 論

本大学作業療法学専攻の車椅子疑似体験学習において、脊髄損傷のある方も参加して実施した。そして、その有効性を検討するために、学生と参加者した脊髄損傷のある方に実習意義、内容についてアンケート調査を実施した。その結果、以下のことが分かった。

- 1) 学生は障害のあるかたの参加に対して、90%が良かったと回答していた。自由記述でも脊髄損傷のある方と行動や話すことにより理解や気づきが深まっていた。
- 2) 参加した脊髄損傷のある方は、実習内容に肯定的であった。自由記述でも車椅子疑似体験の意義を認め、継続の必要性を指摘していた。また、脊髄損傷のある方自身もバリアへの気づきが見られた。

車椅子疑似体験学習で脊髄損傷のある方の参加は、学生と脊髄損傷のある方自身にも有効であることが示唆された。一方的に学び指導する体験学習ではなく、学生、障害者、地域が互いに学びあう課題解決型学習、地域連携型学習としても有用な学習方法であった。

引用文献

- 1) 中野泰志 (編)：障害を理解し、共に学ぶための疑似体験セミナー研究成果報告書，財団法人心身障害児教育財団．1997
- 2) 久野研二，中野由紀子：リハビリテーション国際協力入門．三輪書店．2004．pp206-212．

- 3) 徳田克己．水野知美：障害理解．誠信書房．東京．2005．pp2-50
- 4) 福島 智．中野泰志 他：「多様な障害のある人とのまち歩き」と「障害疑似体験」による共感的理解を通じた「気づき」のワークショップ．日本福祉のまちづくり学会第7回全国大会概要集，2004
- 5) 中野泰志，福島 智：まちづくりにおける「障害当事者参加」と「障害疑似体験」の意義 多様な人の住まう「まち」への気づきを目指して ，日本福祉のまちづくり学会第7回全国大会概要集，2004
- 6) 金城正治：異学年で構成する小集団による車いす疑似体験学習の効果．保健学科紀要．16(1)：pp46-52．2008
- 7) 小川善道：疑似体験と障害者の語りを併用した教育プログラム 障害平など研修に学ぶ教育手法の検討 ，障害学会第5回大会．2008
- 8) 栗原トヨ子．寺山久美子，他：車椅子体験学習における学生の反応．東保学誌．3(3)：pp199-203．2000．
- 9) 小林量作：障害体験から学生はなにを学ぶか 理学療法概論 における障害疑似体験の紹介 ．理学療法学第25巻学会特別号：pp105．1998．
- 10) 小坂橋恵美子，奥谷俊博，他：「障害当事者参加と疑似体験による「気づきのまち歩き」ワークショップその3．日本福祉のまちづくり学会第7回全国大会概要集，2004
- 11) Kath Gillespie, Jane Campbell (久野研二 訳)：権利・平などと差別を学ぶ研究ガイド．明石書房．2005．pp13-37
- 12) 岩田直子：障害疑似体験が伝えること：障害理解教育の比較を通して．沖縄国際大学社会文化研究．9(1)：pp47-68．2006．

The significance of participation by disabled persons in wheelchair experiential learning program

Masaji KINJO

Course of Occupational Therapy, School of Health Sciences, Akita University

In the occupational therapy major at this University, wheelchair experiential learning program for second and third year students was performed from fiscal year 2005 with participation by persons with spinal cord injury. In the present research, following completion of the wheelchair experiential learning program, a questionnaire-based survey and interviews of the students and participants with spinal cord injury were performed regarding the contents and significance of the learning, and analysis was made thereof.

As results, around 90% of the students responded that participation by a person with a disability was good. In the freely written response portion, too, it was stated that understanding and awareness had deepened due to the behavior and conversation. The participants with spinal cord injury were positive about the practical learning contents. In the freely written response, too, the significance of the mock wheelchair experience was recognized, and the necessity of continuing on was pointed out. Also, the participants with spinal cord injury were also able to discern barriers themselves.

Thus, it was suggested that participation of a disabled person in the wheelchair experiential learning program was effective for both students and the disabled person themselves.